
ある女性の選択

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある女性の選択

【Nコード】

N52600

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

芝井探偵第2弾。姪の世話がてらに芝井の名推理が閃く？仕事の依頼が来なくても推理は出来る。

プロローグ

「おい、直。ちょっと見てくれよ。」

芝井が少女に話しかける。直と呼ばれた女の子は男を一瞥した後、またテレビの方へ向きなおした。眠そうに欠伸をしながら。

「ほら。こうして、こうして。ジャーン！なんと10円玉が消えましたあ！」

「いい大人のおじさんが昼間っから手品の練習なんかして何が楽しいのやら。みんな働いてる時間だよ。」

少女は呆れた様子で言う。北条直美、ほつじょうなみ俺の姉である北条里美の一人娘で今年10歳になる。俺と姓が違うのは里美に離婚経験があるからで、里美は生活費を稼ぐために働きに出ている。直美も普段は学校などで母の帰宅時間まで待機しているのだが、それが出来ないときには時々俺の事務所で預かっている。

「だって、一つも依頼が来ねえんだもん。働きたくても働けねえよ。」

まるで駄々っ子のように言う。直美は首を傾げて「まあ、探偵に仕事が無いのは平和な証拠ね。それか、有の腕が信用されていないのかどっちなだね。」と不吉な言葉を口にする。ちなみに『有』とは俺の名である有也ゆちやを略している。姉が俺のことをそう呼んでいるのを真似しているのだ。生意気な奴だ、と思いつつも小さいうちは少し生意気でも元気な方が子供らしく、直美もそれこそと幼少期に親の苦勞を目の当たりにしているので、根は優しくて正直な少女だということも俺には分かっている。この母子を助けているのも、もちろん姉弟ということもあるが、それより先に母が子を思い子が母を思う気持ちに同情しているという面が強い。私情を挟まないことが捜査の鉄則であるが、一転プライベートなことになると人情を前面に出してしまうところが弱点だ、とも思う。

「ふん、お前だって為にもならないようなテレビを見て。宿題はど

うしたんだ？」

「まるで親みたいなことを言うね、有は。今、あたしは有に協力してあげてんだよ。探偵ってのは情報が命でしょ？その情報を有が見ないようなテレビ番組を見て集めてあげてるんだから。」

先日あれだけの推理と知識を披露した（『芝井探偵の推理』参照）芝井も直美の屁理屈には閉口してしまう。この醜態を新田や依頼者に絶対見せることはできないぞ、と固く誓う芝井であった。

「じゃあ、今集めてくれている成果でも聞こうか。」

「ちょうど番組が始まるところだよ。一緒に見ようよ、『ラブ・チヤンス』。素人さんたちが恋人探しするんだよ。」

「らぶ・ちゃんす」

芝井は寒気を感じながらも直美の横に座った。

プロフィール

「さあ、今週も始まりました『ラブ・チャンス』。はたして本日はカップルが誕生するのでしょうかあ？」

番組が始まるや否やハイ・テンションで飛ばす男性司会者が観覧席より鳴り響いている拍手に満足しているのか、満面の笑みを浮かべている。

「さあて男性陣のお三方、準備はよろしいですか？それでは本日の美女に登場してもらいましょう！」

セット後ろの装飾されたドアが開き、そこに女性が一人立っている。初めのうちは大量のスモークでシルエットしか見えなかったが、徐々に煙が引き女性が階段を――スカートが長すぎるのか歩きづらそうに――下りてくる。ロングヘアーにはウェーブがかかって純白のドレスのような衣装に身を包んでいる。そして先程司会者に問いかけられた男性たちとは対極の方の椅子へ座った。可愛いというより綺麗といった形容が良さそうなその女性は若干口元を緩めながら男性たちの方を見ている。司会者は女性が席に着くのを確認してから手元にある紙を見た。

「本日の美女は鷺野麗子さぎのれいこさんです。わが国最高学府の国立大学環境学部卒で、さる大企業の社長令嬢とのプロフィールです。さあ、この才色兼備の美女を射止めるのはどの男性か？さあ、まずは3人の自己紹介から参りましょうか。」

芝井は「なるほど」と納得顔で頷いた。番組の流れを把握したのだ。つまり毎回綺麗な（又は可愛い）一般女性ゲストを連れてきて男性を値踏みさせて、条件が合えばカップル成立という構成になっているのだ。男性にとってはなんと厳しい女尊男卑の仁義なき世界。ある意味、悲哀を誘う（少なくとも私にとっては）番組だ。しかし何気なく視線を移した隣には「今日の女の人は可愛くないね。」と無表情でつぶやく少女がいた。女性強し、と実感したが、そんな

芝井の心理状況とは関係なく番組は進んでいく。

「まずは池口綿哉さんいけぐちわたやからお願いします。」

池口と呼ばれた男性はスツと立ち上がり、サラサラの長い髪を掻き上げる。

「お嬢さん、初めまして池田と申しまして美容室で働いています。私と付き合つてあなたの髪をセットさせてくれませんか？」

まるでホスト崩れのようないかにもキザっぽい奴だ、というのが第一印象。目の前にいる女性はもちろん、観客をも意識した表情や仕草には嫌悪感すら覚えてしまう。しかし主役である女性を見るとまんざらでもない視線を送っている。女はわからん。

「次は成本欣一さんなりもとときんいち、お願いします。」

成本と呼ばれた男性はゆっくりと（多少太っているのもあるだろうが）立ち上がった。

「こんにちは、鷺野さん。私の父はある街の町議員をしまして、私はその秘書として勉強しています。ぜひお付き合いさせて頂いて力を貸してもらいたいものです。」

言い終わるとまたゆっくりと腰を下ろした。典型的な成金の二世、という印象。メタボ気味の体からはカロリーの高そうな食料事情をうかがわせ、終始高圧気味の態度には人を使うことに慣れている一端を見るようだ。しかし、カメラが捉えた女性の映像を見ると、気恥ずかしいのか、ソワソワした様子が映し出されている。まさかこんなのが好みなのか。

「最後に布谷通さんぬのたにとある、お願いします。」

布谷と呼ばれた男はバツと立ち上がると、落ち着き無く手足を動かしながら話し始める。

「あ、あの、こ、こ、こんにちは。ぬ、布谷です。特に取り柄なんて何も無いですが、よろしくお願いします。」

どもりながらも早口で言つと、サツと座ってしまった。どこにでもいる青年、という印象。話しているときの動作や目線が定まらないのは極度の緊張のせいだろう。個人的には前の二人よりはマシだと

思うが、世の女性の意見は違うだろう。良くも悪くも人と違った個性や取り柄というものがあつた方が印象に残り易い。この青年からインパクトのある情報を引き出すのはかなり難しそうだ。女性もそう感じたのか、微笑んではいるものの、その表情は冴えない。

「さあ、自己紹介が終わりました。続きまして、男性陣には事前に我々が用意した質問事項に答えて頂きまして、それをフリップに書いてもらいました。私が質問事項を読みますので、名前を呼ばれましたらフリップを見せて下さい。と、その前に一旦CMに入ります。」

司会者が言い終わるとCMの画面に変わった。ふう、とため息をつきコーヒーを飲もうと台所に行く。コーヒーカップに注がれる琥珀の色と香りを楽しんでいると、背後から「始まるよ」と少女の大声がして一気に現実世界へと呼び戻された。もう少し自分の世界を楽しみたかった。が、現実はこのブラックコーヒーの如く仄暗く、そしてほろ苦い。

フリップ

コーヒークップを片手に再びテレビの前に座ると、CM前に司会者が言っていた質問事項を読み上げるところだった。質問事項は以下の通りだ。

？最初のデートコースは？

？プレゼントを上げるとすれば？

？女性の他に気になる人ができた場合はどうする？

「さあ、まず池口さんからお願いします！」
司会者が声を張り上げると池口は、はにかみながらフリップを見せた。

？夜景を見ながらフレンチを食べる

？あなたに一番似合うジュエリーを差し上げる

？僕はこう見えて一途な男なんで、あなた以外見えやしない

池口はフリップを見せた後にまた髪を掻き上げる。今、自分自身が注目を浴びていることが最高の喜びであるかのように恍惚の表情を浮かべている。芝井は思わず身震いした、まさかこんなことを平然と言える男がこの世に存在するとは。ある意味稀有な人物だ、もちろん悪い意味で。女性の方を見てみるとなんとなく困ったような表情をしている。誰を選ぶのか迷っているのだろうか。

「池口さんの人となりを表すかのようにストレートな答えです。？に関しては浮気なんか有り得ないということですね？」

「もちろん。愛する人がいれば、他の人など人形に等しいですからね。」

意味ありげな視線を女性に向ける。女性は目線を逸らす。

芝井はこの場から逃げ出したくなる衝動に駆られた。もうだめだ、恥ずかしさと息苦しさで憤死しそうだ。よくこんな番組を平気で見てられるな、これも時代の流れなのか。

「次は成本さん、お願いします。」

成本は神妙な面持ちでフリップを裏返した。

？パーティーに招待する

？美しい花をプレゼントする

？何事も議論することが大事である

「なるほど、これも誠実な答えですね。」

司会者は一人納得顔で頷いている。

「？のパーティーというのは具体的にはどのようなことですか？」

「私どもは政財界のパーティーに招待されることが多いものですが、そこに一緒に一緒にしてもらい、私の自慢の彼女です、とみなさんに紹介したいですね。」

「鷺野さんも社長令嬢ですから、お似合いのカップルになりそうですね。」

司会者が煽り立てる。それを聞いた成本も力強く頷いている。

「さあ、最後は布谷さんです。」

布谷は未だ緊張がほぐれないのか震えた手でフリップを裏返した。

？海沿いをドライブする

？茶碗をプレゼントする

？今までモテたことが無いので想像ができません

「うーん、なかなか捉えどころの無いような答えですが。？の茶碗というのは？」

司会者も不思議そうな顔で尋ねる。

「あ、僕は趣味で陶芸をしています。」

「それを彼女に、ということですか。陶芸とはなかなか渋い趣味をお持ちですね。」

言われた布谷は照れ隠しというか、少し表情は和らいたが直ぐにうつむいてしまった。

「さあ！鷺野さん、よろしいですか？三人の中で付き合っても良いという方を選んで、その人の手を握って下さい。そうすればカップル成立です。もしどなたもちょっと、というのであればお手元のボタンを押してください。その際には男性方に向かって冷却スプレーが放射される仕組みとなっております。しかし今日は成立する予感がします。男性陣もなかなか豪華なメンバーですからね。」

司会者が暗にカップル成立を願うコメントを発する。まあテレビ的にもカップルが成立した方が良いので先のコメントも一応理解は出来るが、公平性に問題があるのではないかとも思ってしまう。女性はどうと、すでに心の中で決断を下しているのか、落ち着いて微笑んだりしている。

「それではCMの後、発表したいと思います！」

司会者は気合の入った声で決めポーズをとった後、画面がCMに移った。

「どう？」

CMに入ってから直美が聞いてきた。

「どうって？」

「あの女の人が誰を選ぶかだよ。」

「誰でもいいよ。」

関心無さそうに芝井は答える。だが芝井の言葉を無視して「私だったら2番目の秘書のおじさんかなあ、お金持ってそうだし。」と話している。

「お前、あんな奴を選ぶのか？金さえ持ってりゃ誰でも良いってのか？」

呆れた声で言う。しかし直美も平然として

「あの中だったらっていう話だよ、別に現実に結婚するわけじゃないんだから。それにお金は大事だよ。この国で生きていこうと思ったら、ね。」

と答える。さらに「そんな細かいことまで考えてるから、いつまで経っても結婚できないんじゃない？」とまで言われてしまった。ぐぐぐ。軽い敗北感を味わった芝井だが、俺もここで全面降伏するわけにはいかない、というわけでもないが直美に反撃するために「それなら、あの女性が誰を選ぶのか当ててやろうか？」と言った。

「えっ、有は分かってるの？」

直美は教えて欲しそうな顔で振り向いた。そうだ、その顔だ。芝井は優越感に浸り、十分もったいぶりながら自分の推理を披露することにした。

推理（解答）

「結論から言うと、彼女が選ぶのは布谷だと思う。」

芝井はコーヒールを一口飲んで喉を潤してから話し始めた。

「あんな冴えない人を？」

直美は驚いた様子で目を大きくしている。

「うん。まあ消去法でいくと最終的に二択になるんだが、その最後の選択は彼女の人間性が関わってくるんで絶対と言い切れないが8割方当たってるんじゃないかと思っている。」

「ふうん。何か理由があるのね？」

「そうだ。まず、この女性が才色兼備だという事実は覆される。色、つまり容姿については人それぞれの好みがあるだろうから置いておいて、問題となるのは才の方だ。彼女はわが国最高学府の国立大学環境学部卒という肩書きだが、これは嘘だ。理由はこの国最高学府の国立大学には環境学部なんて存在しないからだ。存在しない学部を卒業なんてできるわけがない。たぶん最初はアンケートかなんかで軽い気持ちで書いたんだろうな。テレビで放送されると分かっていたら嘘なんか付かないだろうし。」

「なるほどね。」

直美はしたり顔で頷く。

「そうになると、大企業の社長令嬢というプロフィールも怪しくなってくる。法律では『大企業』という定義はないので、一般的には『法律上の中小企業に属さない企業』の事を指すことが多いんだが、大体は我々が知っている有名な企業のことを指しているので調べれば大概の事は分かる。つまり有名企業の社長の中に『鷺野』という姓があるか、あるいは社長の娘に『鷺野麗子』という女性が存在するか、なんて詳しく調べれば分かってしまうことなんだ。ここで消えるのが町議員の秘書である成本だ。彼は頻繁に政財界のつながりをアピールしている。パーティーなんかには招待されれば学歴その他

の嘘が露見するだろうから彼女が選ぶはずはない。」

「もったいないね。」

ふう、と直美がため息を付く。

「そして、次に選択肢から外れるのは池口だ。彼は自身のことを『一途』な性格と言っている。これが嘘か本当かは本人にしか分からないので、彼女自身もそう認識していると考えていいだろう。さらに彼女も経験的に分かっているとは思うが、ああいう男は顔はもちろんだが付加価値にも興味を示す。言い換えれば、池口は彼女の背後にある『社長令嬢』という肩書きと『金』にも多大な興味を持っているということだ。仮に彼女が池口を選んだ、ということ想定してみよう。まあ付き合ってすぐに、プロフィールが嘘だということとは分かってしまうだろうから池口は彼女に対して急速に興味を失うだろうし、もしかしたらこの事をネタに脅迫されるかもしれないつまり、彼女からすれば池口を選ぶことはデメリットとリスクだらけで良いことなんて一つもない。従って、そんな男を選ぶ理由はない、ということになる。」

「残っているのは布谷だけね。けど誰も選ばないってこともあるんじゃない？」

直美が疑問を口にする。

「そう。これが初めに言った最終的に残る二択になるんだ。せっかくだから残った選択肢に対しての可能性を考えてみよう。まず、誰も選ばなかった、という選択をしたらどうなるか？結果的に嘘はバレないだろうから、彼女にしてみれば一番無難な選択だ。ただテレビ的にも大いに盛り上がりを欠き、彼女の印象もインパクトも無くなりすぐに忘れられるだろう。それは、嘘についてまで虚栄心をあらわにした彼女にすれば非常に面白くない結末だ。つまり、一番安全な選択ではあるものの彼女自身の性格が邪魔をして選び難しくしてしまっているんだ。そこで、最後に残った選択肢だ。これを様々な立場から見て考えてみよう。まずテレビ局の当事者。カップル成立を目的としている番組なので、当然喜ぶべき結果だ。次に視聴者の

視点に立ってみよう。彼女が布谷を選ぶことでどのような効果を得ることができるのか？たぶんどの視聴者も布谷は選ばない、と思っているだろう。布谷自身がパツとしない青年であることもそうだし、他の二人には『顔』や『金・権力』などの利点があるわけだから。それが布谷を選んだことでその意外性に驚き、また『美女と野獣』とまではいかないが冴えない男のシンデレラストーリーとしてインパクトも十分だ。そして何よりも彼女自身がその主役を演じることができ、皆の注目を一身に浴びることができ、さらに彼女の虚栄心も十分満たすことが出来る。放送後は2、3度飯でも付き合って『やっぱり合わないわ』とか理由をつけて別れればいいだけだ。このカップルに限らず、人の付き合いの経過に興味を持ち、調べる奴などまずいない。つまり、様々な視点を通して彼女に降りかかるであろうメリットとデメリットを勘案したときに、『布谷を選ぶ』というカードを切った方が一番効果や反響がある、と彼女が考えた可能性は高い。」

「そこまで考えてたんだ、有は。あつ、CMが終わったよ。」
二人は再びテレビ画面に視線を向けた。

「さあ、それでは発表してもらいましょう！」
司会者が鷺野に判断を促す。鷺野は少し困惑した顔をしていたが、やがて男性たちの前に立ち三人の周りをウロウロしていた。そして最終的に布谷の前で止まり、その手を握った。

その瞬間、観客からは驚きと共に拍手が沸き起こった。

「おお、他の二人を差し置いて布谷さんを選びました！これは奇跡、いや驚きです！布谷さん、おめでとうございます！」

奇跡と表現したことを不謹慎だと思ったのか少し間が空いて言い直したが、拍手と歓声で聞こえ辛かった。天井からは紙ふぶきが舞い落ち、ステージの中央では二人がそれを浴びながら立っている。鷺野を見ると満面の笑みを浮かべていた、虚栄心が満たされた笑みを

浮かべて。

「有の言ったことが当たっちゃったね。何か複雑な気分だけど。」
直美はじつと画面を見ながら言った。

「まあ、人それぞれだけど女っていうのは虚飾というか自尊心の強い生き物だからなあ。」

「フォローになつてないか、と思いながらも直美の肩を叩きながら慰める。と、急に立ち上がり芝井の顔を見て言った。

「けど、私があんな女みたいにならなければ良いだけのことももんね。勉強になつたわ。」

一人で、うんうん、と頷いている。

「有もくだらないテレビに付き合ってくれて有難う。何かお礼をしたいけど、そうだ！うちの担任の先生が独身って言ってたわ、今度紹介してあげるね！」

「いいよ、そんなこと。まあ参考までに聞いておくけど、その先生は何歳だ？」

あくまで興味が無い雰囲気を作り出しつつ、探りを入れてみる。

「えっとね、来年で定年退職だつて言ってたよ。」

「！！！！」

こいつの誘いに乗った俺がバカだった。芝井は唇を噛みしめながらコーヒークップを洗おうと台所に向かって歩き出した。

——了——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5260o/>

ある女性の選択

2010年11月11日16時12分発行